

卒業生へのブックリスト



～卒業・修了おめでとうございます！～

これから世界に旅立つ皆さんに、社会に出る前に読んでほしい本、20代までに読んでほしい本などを先生方を選んでいただき、ブックリストにまとめました。

ぜひ、今後の読書にお役立て下さい。

今後のご活躍を祈っています。

2009.1

ブックリストにご協力頂いた先生方

知能情報工学研究系

◆下菌真一先生

電子情報工学研究系

◆小田部荘司先生

◆藤原暁宏先生

システム創成情報工学研究系

◆藤尾光彦先生

機械情報工学研究系

◆高橋公也先生

◆田中和明先生

人間科学系

◆石橋邦俊先生

◆栗原好郎先生

◆中川勝昭先生

情報創成工学研究系

◆大石英貴先生

保健センター(臨床心理士・カウンセラー)

◆菊池悌一郎先生



ご協力頂いた先生方に感謝を
申し上げます。

下 菌真一先生(知能)のおすすめ

◆『ギリシャ悲劇Ⅰ ソポクレス』ソポクレス著 筑摩書房

ギリシャ悲劇 ソポクレス、アイスキュロス、エウリピデス の作品、全巻 筑摩書房
(991||G-4||1-b, 991||G-4||2-b 本館所蔵)

◆『ギリシャ喜劇Ⅱ アリストパネス(上)(下)』アリストパネス著 筑摩書房 (絶版)

◆『イーリアス (上)(下)』ホメロス著 岩波書店 (081||I-4-5||102-1, 081||I-4-5||102-3-B)

◆『オデュッセイア(上)(下)』ホメロス著 岩波書店 (081||I-4-5||102-4, 081||I-4-5||102-5)

◆『失楽園 (上)(下)』ミルトン著 岩波書店 (081||I-4-5||206-2, 081||I-4-5||206-3)

◆『ご冗談でしょう、ファインマンさん』R・P.ファインマン著 岩波書店(420.2||F-1||1, 420.2||F-1||2)

◆『困ります、ファインマンさん』R・P.ファインマン著 岩波書店 (420.2||F-2)

◆『かもめのジョナサン』リチャード・バック著 新潮社 (933.7||B-12)

◆『アルケミスト』パウル・コエーリョ著 角川書店 (969.3||C-1)

(2008 年度ブックリストより)

小田部 荘司先生(電子)のおすすめ

◆『太陽の塔』森見登美彦著 新潮社 (913.6||M-168)

失恋した大学生の妄想が京都を舞台に暴走する。日本ファンタジーノベル大賞を受賞した森見登美彦の処女作です。大学時代に恋人はなく別にスポーツに打ち込んだわけでもなく、ただ男どもだけで永遠と語り合い、過ごす。たぶん卒業して数年後くらいに読んでみるとあまりの懐かしさにびっくりするのだらうと思います。そのうち読まれてください。新潮の100冊にも入りました。

藤原 暁宏先生(電子)のおすすめ

◆『うらおもて人生録』色川武大著 新潮社 (914.6||I-45)

「生きていくための技術」を学んだ本です。

藤尾 光彦先生(システム創成)のおすすめ

◆『坂の上の雲』司馬遼太郎著 文藝春秋 (913.6||S-30||1~6)

若かった頃のひたむきな日本が描かれています。

高橋公也先生(機械)のおすすめ

◆『物理学とは何だろうか(上・下)』

朝永振一郎著 岩波書店 (081||I-1||85, 081||I-1||86)

科学の本質とその発展を深く知るには最も最適な本。

産業革命において技術と科学がどのように関連しながら発展してきたかを知ることが出来る。

◆『ある気象学者の一生』 藤田哲也著 (451||F-1||A)他

九工大(明専)出身でアメリカに渡り竜巻の研究をした世界的な気象学者の自伝

田中和明先生(機械)のおすすめ

◆『良いプレゼン 悪いプレゼン～わかりやすいプレゼンテーションのために』

後藤文彦著 カットシステム (334.6 || G-2)

プレゼンテーションのスキルを高めることができます。

石橋邦俊先生(人間科学)のおすすめ

◆『楽は堂に満ちて』 朝比奈隆著 音楽之友社 (762.1||A-1)

◆『厄除け詩集』 井伏鱒二著 筑摩書房 (911.1||I-1)

◆『私の中の流星群』 草野心平著 筑摩書房 (914.6||K-8)

◆『孔子伝』 白川静著 ※『白川静著作集 6』(222||S-3||6)に収録

◆『天に送る手紙』 森敦著 小学館(絶版)

◆『戦艦大和ノ最期』 吉田満著 講談社(916||Y-18)

◆『古詩選』(新訂中国古典選 13) 朝日新聞社 (082||C-1||13 本館所蔵)

◆『荘子』(新訂中国古典選 8,9) 朝日新聞社 (082||C-1||8, 082||C-1||9 本館所蔵)

栗原好郎先生(人間科学)のおすすめ

◆『ころ』 夏目漱石著 新潮文庫(913.6||N-64)他

この何の諧謔も軽快さもない小説は三部(上・先生と私、中・両親と私、下・先生と遺書)から構成されている。初期の「吾輩は猫である」や「坊ちゃん」などと比べると同じ作者の作品かと疑いたくなるほど、「ころ」の調子は重く、暗い。場所の限定性も弱いし、Kという登場人物などの描写も極めて抽象的である。情報量が少ないと読者としては深読みをしたくなる。ヒッチコックの「裏窓」のように、状況証拠だけがあって確証のないサスペンスは、読者の潜在的な欲望を抉り出す。しかし、それは読み直せば読み直すほど、複数の解釈を許容するようになる。なぜなら、もともとテキストが明

示していない事を読者が想像力で補った場合、誰に感情移入をするかによって「読み」が異なる場合が多いからだ。さらに、この小説の構造自体が「私」の回想という独白の形式をとりながら、その中でさらに「先生」の遺書という形で「先生」の独白を入れているいわゆる「入れ子構造」をとっていることが、その簡素な文体とは裏腹に作品に多様な解釈を許容する結果となっている。「先生」の遺書自体が作品の最後に置かれ、それをも「私」の回想の一部として引用されていることは、遺書の位置づけに「私」が作為を混入させているという疑念を抱かせる。ましてや妻の存命中はこの遺書は公開してくれるなどという「先生」の唯一の希望を裏切り、先生の奥さんがまだ生きているのに遺書を暴露している点を考慮すれば、「私」の恣意性を差し引いて小説的真実を捕えないといけない。さらに、漱石自身が「草枕」や「虞美人草」などに見られるような想像力の逆りや詩的な幻想を抑制した文体を用いているから一層、読者は自らの想像の翼を広げるのかもしれない。そして、「先生」の妻にだけ「静」という固有名が与えられ、あとは仲間内だけで通用するような呼称が使われている点も読者の不審の念を呼び覚ます。最後に自殺する「先生」を殉死した乃木大将と単純に結び付けて考えると、乃木の妻の名が静であったという今更ながらの落ち着いたいい解釈になるのだが、ことはそう簡単にはいかない。「静」という女性が「先生」の人生に与えた影響の大きさを考えれば考えるほど、この小説が三人の男（つまり「私」、「先生」、「K」）だけによって成り立っていないことがはっきりしてくる。ジラルルの「欲望の現象学」を持ってこなくても、ライヴ関係は、お互いの欲望を駆り立てる。「K」の「お嬢さん」への想いを知った「先生」は一気に「お嬢さん」との結婚へと傾斜してしまう。それを即座に「お嬢さん」の「技巧」と取ることは出来ないにしても、「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子を遣る筈がありませんから」と即座に自信を持って応えた下宿の奥さんの反応を見れば、「先生」の「お嬢さん」への結婚の申し込みは、前もって仕組まれたものだったとはいえないだろうか。「お嬢さん」が三人の男の運命の鍵を握っている、そのことで三人の男が運命に翻弄されることを考えれば、「お嬢さん」にだけ固有名を与えた漱石の意図も想像できるような気がする。また、この作品の上と中に出て来る「私」は作品全体の語り手でもある「私」で、下の「先生と遺書」に出て来る「私」は「先生」のことであるのは言うまでもないが、読んでいるうちにその区別が曖昧になり、「私」＝「先生」という構図が見え隠れするようになる。つまり、「先生」の遺書が、「私」が「先生」の歩んだ道をこれから辿るという暗示みたいなものに思えてくる。あるいは、「私」が「先生」に何となく引かれたのも、自分の将来の姿と二重写しになったからではないのだろうか。漱石が、固有名をほとんど使わないで独白という形式にこだわったのも、こうした「多重構造」を生まんとしてではないのか。一人称の語りを読者を特権的な場に置き、自分だけが「秘密」を打ち明けられているという意識を読者に潜在的に持たせてしまうことも、この小説の魔力になっている。

中川勝昭先生(人間科学)のおすすめ

◆『赤と黒』スタンダール著 (908||S-1||19)他

面白い小説に出会い、それに読み耽るといのは何ものにも代えがたい経験だ。それを「幽体離脱」にたとえる人もいる。つまり、物語の世界に没入するあまり、寝食を忘れ、さらには自分の肉体的な感覚さえも忘れてしまうということだ。『赤と黒』はそういう経験をさせてくれる小説だ。ただし、若いうちに読むことが条件だ。年齢を重ねて自分の限界が見えてくるようになると、物語の主人公に感情移入するのが次第に難しくなってくる。ジュリアン・ソレルの成功と挫折を自分のものとして生きられるのは、現実の生活の中でも自分の可能性が大きく広がっている間だろう。

大石英貴先生(情報創成)のおすすめ

◆『富の未来(上)(下)』

トフラー、アルビン・トフラー、ハイジ著 講談社 (304||A-9||1, 304||A-9||2)

これからは IT を使って消費者が企業の代わりに生産活動も行う、生産消費社会になります。さらに、消費者同士で無償で交換する非金銭経済も大きくなっています。IT の与える社会への影響について、歴史的な認識も踏まえた視点を備えた良書です。

◆『フラット化する世界[増補改訂版](上)(下)』

トーマス・フリードマン著 日本経済新聞出版社 (361.3||F-2||1, 361.3||F-2||2)

グローバル化と IT によって世界中の人に機会が与えられるようになり世界がフラットになりつつあります。生活者としては便利になると同時に、働く社会人としては競争相手が増えます。日本国内のニュースでは伝えられない世界の変化の事例が満載の良書です。

◆『資本主義と自由』ミルトン・フリードマン著 日経 BP 社 (332||F-2)

金融危機に対する過剰な反応として自由主義が批判されています。しかし反動として規制の多い社会を選ぶことは愚かです。それを 40 年以上前に論じたフリードマンは何度読んでも目からうろこが落ちます。政府が手を出す必要のないことを具体的に列挙して、読みやすい上に奥も深い良書です。

菊池悌一郎先生(保健センター)のおすすめ

◆『精神の生態学 改訂第 2 版』G・ベイトソン著 佐藤良明訳 新思索社 (389||B-5||2)

一生付き合える友人や配偶者を持つのは、人生を豊かにするうえでとても重要ですが、

本に関しても同様と思います。この本は、まさに「一生もの」です。僕が初めてこの本に出会ったのは大学 4 年の秋、大学の図書館でした。著者のグレゴリー・ベイトソンは、人類学者ではありますが、そのフィールドは、ある時はニューギニアやバリの島々、ある時は動物園や精神病院、ある時はクジラやイルカのプール、ある時は娘との対話…、と学問領域にとらわれず自由であるのですが、その思索は、深くて広く、そして独創的であると思います。しばらく絶版状態でしたが、どうしても手元にはしくて神保町の古本屋街を探しまわった思い出もあります。2000 年に改訂第 2 版が出て手に入りやすくなりました。じつは僕もまだ十分に理解できていないのですが、じっくり一生かけて読み込んでいくのが楽しみであります。

(分館) 図書館員のおすすめ

◆『その日のまえに』 重松清著 (913.6||S-73)

貴方は大切な人に何を遺せますか？何を遺したいですか？大切な人がいますか？

これから多忙な日々が始まります。その前の少しだけゆとりのある今読んでみませんか？心を亡いそうになった時、ふと思い出して自分の生き方を考えるよすがになればと思います。

単に泣きたい気分の時にもお勧めです。呼吸困難になるほど泣けます。

◆『生きるヒント [1]:自分の人生を愛するための 12 章』 五木寛之著 (914.6||I-13||1) 他 明治時代の青年たちは、出会った時、「こんにちは」でも「ごきげんよう」でもなく「悲しいではないか！」と言っていたそうです。

何がそんなに悲しいのか？

しかし現代にも異国の紛争や不可解な殺人など悲しむべきことはたくさんあるはずで

す。
たまには自分の身近な話題ばかりでなく、人生のこと・社会のこと・世界のこと、考えてみませんか？？？

全12章からなっておりますので、気になる章から読み始めても構わないと思います。
文庫版もありますよ。

◆『モモ: 時間どろぼうと、ぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子のふしぎな物語』 岩波書店 (943.8||E-2) 他

あなたは大切な時間をどのように使っていますか？

この話の主人公、不思議な少女モモの友人達は、ある時からみんないつも忙しく時間に追われるようになります。それは時間どろぼう達の仕業だったのです！モモはカメのカイオペイアと共にみんなの奪われた時間を取り戻すことができるのでしょうか？



【編集・発行】

九州工業大学附属図書館

情報工学部分館図書係

2009年1月（第3版）

tos-jphotosyo@jimu.kyutech.ac.jp